

東日本大震災 被災地の教師と生徒の想い

～震災があっても変わらないもの～

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、

東北地方の太平洋沿岸部をはじめ広範囲に

甚大な被害をもたらした。

『VIEW21』編集部では、

4月18日から被災地の高校6校を訪問した。

訪問校（訪問順）

4月18日／宮城県気仙沼高校、岩手県立大船渡高校

4月19日／岩手県立高田高校

4月20日／岩手県立釜石高校、岩手県立宮古高校、岩手県立宮古商業高校

被災地の高校の教師と生徒は

震災下の学校で何を思い、考え、

そしてどう動いたのか。厳しい状況の中でも、

次代を担う生徒とともにあろうとする教師の言葉でつづる。

お話を聞かせてくださった先生方に改めてお礼申し上げます。

◇岩手県立釜石高等学校 平成23年度1学年通信◇

SCRUM

平成23年4月18日発行

1

1年生の皆さん、いよいよ新生活のスタートです。皆さんがしっかりと、またスムーズに高校生活を送っていただけるように、1学年では学年通信「SCRUM（スクラム）」を発行し、情報を提供・発信していきます。この第1号では、皆さんに書いてもらった「高校生活の抱負」から、一部を紹介し、一緒に高校生活を送ろうとしている仲間たちは、何をどのように考えて今ここにいるのでしょうか。読んでみてくださいね。

私には釜石高校の生徒になって頑張りたいことが三つあります。

一つ目は、中学校から続けてきた「無遅刻・無欠席・無早退」を高校でも継続させることです。私はこのことを実行することによって、より健康的な高校生活を送れると思っています。

二つ目は、勉強と部活動の文武両道を目指すということです。高校の勉強は中学校の勉強とは量も内容も進むスピードも速いので中学校の時のように、部活動ばかりに集中してしまったり勉強の方で遅れをとってしまいます。私は、そのようなことにならないようにその週にやった勉強内容は週末にまとめて復習したり、次の週の分の予習をしたりして勉強に遅れをとらないようにしたいと思っています。そして、自分のできる範囲での文武両道を目指していきたいです。

三つ目は、たくさんの確度に積極的にチャレンジして資格を取得するということです。……将来のためにも、……たくさんの資格を取得したいと思っています。

私はこの三つを目標に掲げ高校生活を送っていきたくと思っています。そして……今回の震災でたくさんお世話になった地域の方々や被害を受けた釜石のために少しでも恩返しができるように……地域のために働きたいです。そのためには高校生活の三年間は目標に掲げた事を守って、勉強・部活動共に頑張りたいです。

（Aさん）

高校では、集団の中でうまれることなく、自分の役割を見つけ出し、行動できるようにしたいと思います。中学校の卒業式の日、担任の先生が「今、君達ができることは、しっかりと高校に通って勉強することだ」とおっしゃいました。入学したら、勉強も部活動もしっかり取り組み、釜石の高校生は災害なんかには負けてはいないということを示

していきたいと思っています。そして、周りの人達のために行動できる人間になりたいと思っています。

（Mさん）

東日本大震災が起き、避難所で物事を冷静に考えてみると、高校は勉強も難しい、大変な事が沢山あるのではないかなと思いました。そして大きく遅れた卒業式で、先生に「これからの釜石を建て直すのは、君達だよ」と言われました。そこで僕は気がきました。僕達が社会に出るのは、すぐ先なのだ。……ここでなんとなく頑張っていたら、近い将来必ず困ることになる。そうなら釜石の再建に貢献できなくなってしまふ。高校からは「頑張らなければいけない」という事なんだ。そう思い、自分の考えを改めることができました。……この3年間をだらだら過ごすか真面目に過ごすかで、大学への進路、そして社会人としての生活に影響が出てくるので、少し前まで僕が思っていたなんとなく頑張るのではなく、目標を持って、勉強も部活動も真剣に取り組んで、充実した3年間を送り、充実した人生を送れるように頑張っていきたいと思っています。

（Kくん）

常に感謝の心を持って生活することです。……僕は、常に感謝の心を持って生活し、ありがとうを言葉にして、高校生活をおくりたいと思っています。

（Rくん）

私は中学校で大抵の事を中途半端に過ごしました。あらゆる事を面倒くさがり、その場しのぎで適当でした。……高校では勉強を絶対に中途半端にしたくないです。……帰宅してからの時間の過ごし方が重要になってくると思うので、有効に使いたいと考えています。週末など普

釜石高校1学年通信「SCRUM（スクラム）」第1号の一部。
入学したばかりの生徒が、高校生としての決意を書いた。
震災の中で気付いた周囲の優しさへの感謝の言葉とともに、
次の時代に向けて復興を担っていこうという決意の言葉が並ぶ。

厳しい現実と向き合う

「津波が町を襲う瞬間を目にし、家族の安否も分からない中で257人の生徒は取り乱すことなく、野球部の雨天練習場で避難してきた人たちのために行動してくれました。そんな生徒を私たちは心から誇りに思いました」（高田高校）

校)

家を失い、家族を失った。

こんなときに勉強など

始めているのだろうか

地震発生から1か月余りが過ぎた4月第3週、東北地方の太平洋沿岸部の高校は、学校再開の道をゆつくりと歩き始めていた。数日前に入学式・始業式を行ったばかりの高校、5月の登校開始に向けて準備をする高校とそれぞれ状況は異なる。だが、落ち着いて過ごせる時間と場所を早く生徒に与えたいという教師の思いは同じだ。

「ここでやっと泣ける」

避難所で暮らすその生徒は

担任の前で初めて涙を見せた

既にいくつかの高校は、4月上旬から教室を自習室として開放していた。だが、いずれの高校も「多くの生徒、そして多くの教師が家族や家を失った。避難所からの登校にバスの2時間以上掛かるような生徒もたくさんいる。そもそも教科書もない。こんなときに、勉強など始めているのだろうか」と悩みながら、

生徒の「居場所」をつくる準備を進めてきた。

「生徒の多くは気丈に振る舞っています。しかし、学校で心許せる担任と二人きりになって『やっと泣ける』と初めて涙を見せる生徒もいます。避難所でも家族の前でも気を張っているからこそ、学校が本心をさらけだせる場所にならなければと実感しました」（宮古高校）

避難者、復旧に当たると自衛隊員、全国からのボランティアの姿によって、校内の風景は大きく変わった。それでも教室に入れば、クラスメイトや教師と語り合い、勉強するという当たり前の時間を取り戻すことが出来る。

「高校生として当たり前の時間を過ごすことで、疲れた心を癒やしてほしいのです。部活動もその一つです。スポーツなどで思い切り体を動かして、エネルギーを発散させることが、以前の生活に戻るきっかけになるような気がします。今ほど高校生にとっての文武両道の大切さを実感したことはありません」（気仙沼高校）

「高校生として当たり前の時間を過ごさせたい」と教師は皆一様に口をそろえる。大きな被害は免れた生徒であっても、震災が生み出した厳しい現実と直面していることを知っているからだ。例えば、生徒には校内の避難所でボラン



大船渡東高校同窓会館につくられた高田高校の臨時職員室。



沿岸部の多くの学校は、校舎の一部が避難所になっている。(写真/EPA=時事)



3階まで浸水してしまった高田高校の校舎。(写真/時事)

ティア活動をする者も多いが、長引く避難所生活に心身ともに疲れた人々から不平不満をぶつけられることもあるという。「避難所に届いた食料を小さな子どもに優先して与えていた生徒が、大人から『分配が公平ではない』と文句を言われたこともあった。10代には荷が重い、経験しなくても良いことまで生徒に経験させてしまっているのではないだろうか」

どんなに苦しくても

生徒のためにやめてはいけない

取り組みがある

誰もが生きることだけで精一杯な状況の中で、けなげにボランティアに励む生徒の姿を見ながら教師たちは自問する。

だが、「当たり前前の時間」が遠ざかり、目の前の現実戸惑っているのは実は教師も同じだ。

「約1か月の授業の遅れを取り戻すために、ぐいぐい引っ張っていくべきか、じっくり見守るべきか、生徒一人ひとりが現状をどう受け止

ゼロではなく、
マイナスからのスタート
それでも夢は諦めさせたくない

めているかを見極めてからでないか決められません。しかし、私たち教師も、1か

月間の混乱を乗り越え、生徒に向き合う感覚を今、なんとか取り戻そうと努力している最中なのです」(大船渡高校)

被災体験との向き合い方も生徒によって異なる。そのことが指導を難しいものになっている。

「『こんな怖い目に遭った!』と友達と声高に

被災体験を語り合うことで心の傷を癒やそうとする生徒もいれば、まだ言葉に出来る段階にはなく、そんな話を耳にするのもつらい生徒もいます。同じ教室にいるそうした生徒に、私たちはどう接すれば良いのか。結局は生徒一人ひとりをみていくしかない。教師全員がすべての生徒の担任になったつもりできめ細かく接するしかありません」(宮古商業高校)

教師全員で……。その思いは高校の枠を超えたつながりにおいても同じだ。

「毎年、岩手県沿岸部の高校が集まって進路指導に関する勉強会を行っています。今年も5月に予定通り実施します。震災で被害を受けた学校同士がフォローし合い、チームとして難局を乗り越えるため、中止や延期をせず、行うべきだと考えました。どんなに苦しくても生徒のためにはやめてはいけない取り組みがある。これもその一つだと確信しています」(大船渡高校)

入試を控える3年生の表情からは、焦りが痛いほど伝わってくるという。未曾有の震災をどう乗り越え、入試と向き合うのか。教師たちも初めての体験の中で模索を始めたばかりだ。

「ライブルは全国の受験生であり、既に大きくリードされていることは教師も生徒も理解しています。ゼロではなく、マイナスからのスタートですが、それでも生徒には夢を諦めさせたくない。『震災があったから夢がかなわなかった』と言わせたくないのです」(釜石高校)



気仙沼高校の廊下には、全国の高校から寄せられた応援メッセージが掲示されている。



大船渡高校の校内には、全国からの支援物資が並ぶ。



水没し、破壊された校舎から、教師がのぼりを探し出し、校門の代わりに立てている。

明日の希望を見つめる

学校現場の混乱と戸惑いの中、授業は満足に出来なくても、生徒たちは多くのことを学んでいることを教師は感じ始めているのも確かだ。

「これまで『自分は何がしたいか』という視点だけで進路を語っていた生徒が、家族や地域

教科書もない、授業も出来ない
しかし、生徒は多くを学んでいる

のために何が出来るかという視点で進路を語るようになりました。厳しい現実を

受け止めて自分の力としている彼らを見て、生徒の夢をかなえることが私たちの使命なんだと改めて実感しました」(気仙沼高校)

中には、住む家を失ったり、保護者が職を無くしたため、家族に経済的な負担を掛けないよう進路を変更する生徒もいる。

もはや「授業中心」ではない
「授業命」だ

「志望を変更せざるを得ない生徒が出てきています。大人の方がまず厳しい現実

実の前で途方に暮れています。子どもたちは大人以上に冷静に状況を察し、自らの進路を変えようとしています。しかし、今は『待つこと』なのだと思えます。経済的支援策など、今後状況は必ず変わる、変わらなければいけないのだ

と思います。『結論を急ぐな』と生徒だけでなく、教師たちにも伝えていきます。祈るような気持ちでそう話し続けています」(宮古高校)

生徒が希望を捨てずにじっくりと進路を考えられるよう、教師たちはこれまでの指導方法にこだわらず、生徒の状況に合わせて変えていかなければならぬと考えている。

「避難所生活を終えて親戚の家に身を寄せる生徒もいますが、その家でも水はまだ出ないし、電気もつかない。もちろん自分専用の部屋も机もない。とても落ち着ける状態ではない生徒に、これまでと同じように『しっかり家で予習復習をしてきなさい』とは言えません。もはや『授業中心』ではありません。『授業命』の覚悟で私たちは教壇に立ちます」(高田高校)

教師の『授業命』の覚悟は、決して焦りではない。授業の質を問いつつ冷静な覚悟だ。

「教科書がそろっていない今は、それぞれの教科の魅力、学びの面白さを伝える授業が出来ないか、突き詰めて考える良い機会です。授業の遅れも焦って取り戻そうとするのではなく、3年生であれば入試までの授業計画をきちんと説明し、教師も生徒も先を見通した上で授業に臨みたいと考えています」(釜石高校)



←岩手県立宮古
高校・吉田達行
先生



←岩手県立高田
高校・左から村
上愛先生、大関
真人先生、滝川
小百合先生



←宮城県気仙沼
高校・左から千
田健一教頭、庄
子英利校長、佐
藤忠司先生

→岩手県立宮古
商業高校・左か
ら佐藤直子先生、
菊地龍幸校長、
菅原一志先生



→岩手県立釜石
高校・左から平
田修先生、高橋
篤志先生



→岩手県立大船
渡高校・左から
切田壮先生、平
田勝彦先生



授業の遅れは、決して楽に取り戻せるものではないが、生徒がいる限り、諦めることなど出
来ない。教師の心の中にあるのは、覚悟だけだ。

「生徒全員の夢を大切にしたい。私たちのその
思いは震災があっても変わりません。2011
年度入試で、本校は国公立大進学者数が開学以

生徒一人ひとりの夢を大切にしたい
だからこそ次の入試でも私たちは
言い訳を探すことなく挑みたい

来最多となりました。
12年度でも、必
ずその数を超えたい。
言い訳を探すこ

となく、一人ひとりの夢の実現の結果であるそ
の数を超えることに挑んでいきたいのです」(宮

古高校)

地域への使命も教師たちは強く感じている。

「本校は校舎がすべて水没したため、隣の市
にある、統合された高校の旧校舎で授業を再開
します。地元から離れることになっても、地域
の高校としてのアイデンティティーを持ち続け

少しずつ、しかし確かに

町は復興の途にあることを

生徒と確かめ合いたい

ることが出来るか、

大きな課題です。甚

大な被害を受けた地

元が復興するために

は、何としても本校が地元の学校として存続し、
地域の人々の希望の一つになりたい……そう願
わずにはいられません」(高田高校)

復興にどれだけの時間と忍耐を要するのか。

延々と広がるがれきの町に立って、その問いに
答えられる者は、一人もいないように思われる。

「テレビの映像では何も変わっていないよう
に見えるがれきの山も、少しずつ、しかし確か
に片付いています。ゆっくりとではあっても町
は復興の途にあることを、そして私たち一人ひ
とりにも出来ることが必ずあることを、生徒と
確かめ合いたいです」(宮古商業高校)

小さな一歩を見逃さない。そして、生徒と共

にその一歩の中に希望を見出す。高校教師がこ
れまでも大切にしてきた「教育」が今、震災の
地で一層大きな価値を持つようとしている。

被災地の新1年生の言葉

～釜石高校1学年通信「SCRUM (スクラム)」より～

3 月11日の大震災を通し、「人とのかわり合いの大切さ」を身をもっ
て知りました。未知の世界である高校生活の3年間。私は私に出来る
ことをおっくうがらず、怖がらずにこなし、困っている人や助けを求め
る人に対して、自ら進んで手を差しのべられるような人間になりたいです。

各 地の、いろんな人たちが自分から進んで、物を譲ったりしているの
を聞いて、とても感動しました。自分からも進んで何かを出来るよ
うな人になるために、日頃からどんなに小さな事でも、出来るように全力
で頑張りたいと思います。「される人からする人へ、助けられる人から助
ける人になる」ということも高校生活の抱負に加えたいと思います。

高 校生活の抱負や不安はたくさんあるが、自分が踏み出さない限り始
まらない。自分の生活を良くするのも悪くするのも自分だ。このよ
うな状況の中、明るい未来をつくるためには、自分の進むべき道をしっか
りと見つけ、それに向かって努力していかなければならないのだと思う。

豊 かで実りの多い高校生活を支えるために、校内でも校外でも品格の
ある、信頼される高校生になりたいです。そのために、先輩、後輩、
男女区別なく明るくあいさつし、身だしなみは日頃から整え、早寝・早起
き・朝ご飯の「生活スタイル」を確立したいです。先が見えない不安に押し
潰されそうになるけれど、こんな時だからこそ夢を持って頑張りたいと
思います。大震災で失われた命の分まで強く生きていきます。

高 校生活の中で「人のために生きる」自分を形成したいと思っていま
す。そのためには、一般教養にあたる基礎学力と、部活動で養う健全
な精神と肉体とが必要だと思います。そして、生きていることに感謝し、
助けを求める声には何の見返りも考えず手を差しのべられる強さを身に付
け、町を復興させる力のある高校生になりたいです。私は私に出来ること
を進んで行い、仲間とともに高校生活を過ごしていきたいです。

※文意を変えない範囲で原文を編集しています。